文化プログラムで本国の音楽を楽しむ

ネパールと香港から招かれた男性歌手と女性司会者

あるネパール人の日本経験

南　真木人（みなみ まきと）
民族社会研究部

ここ数年、日本に超過滞在し働いているネパール人のことを調べている。彼／彼女らの経験談は実に愉快で、戸惑いや生活感覚がにじみでているが、他方で、私たちが気づかない「日本」を露わにしてくれる。調査の過程で、あるネパール人の友人から聞いた、そんな話を紹介したい。

友人が仕事からアパートに戻ると、来日して間もなくまだ就労していない居候がいった。「今日は近くのスーパーで安い米を見つけたから買っておいたよ」。自慢げに見せる大きな袋は、犬の絵が描かれたドッグフードである。世の中にドッグフードなるものがあることを知らない人にとって、それは「犬印の米」に映ったとしても無理からぬことだ。しかも、日ごろから彼／彼女らは、日本では中身と包装のデザインが一致しないと感じているのだ。「それで返品したの？」と私が聞くと、友人はそんな恥ずかしいことはできないという。「それじゃ犬を飼っている日本人の同僚にでもあげれば？」というと、「とんでもない、そんなことをしたら『お前、犬も飼ってないのに何でこんなもの買ったんだ』と馬鹿にされるに決まってる」という。こうして、ドッグフードは押入れにしまわれた。

職場の日本人から見下されたくない、という気持ちは強い。たとえば、同僚に「ネパール人は大便の後で、水で拭くんだってな」といわれると、すかさず「そうだけど、日本人はトイレットペーパーができる前は何で拭いていたの？」と尋ね返す。

「チリ紙」

「じゃその前は？」

「新聞紙だろう」

「じゃ新聞紙ができる前は？」

「知るか！」

挙句は「ウォシュレットを先取りしていたのがネパールなのだ」と言い負かす。

こんな話も聞いた。JICA（国際協力機構）の研修で、ネパールの元の職場の同僚女性が来日し、東京を案内したときのことだ。昼食に偶然入ったレストランは、お好み焼きを自ら鉄板で焼く店であった。いきなり生卵がのったものが出てきて、女性は「えっ、これ食べるの？」という。友人もさすがにギョッとしたらしいが、ここでひるんでは格好わるい。日本人は生卵を食べるし、これは付け合せのサラダだろうと思い口に入れようとした。間一髪、店員が慌てふためいて飛んできて、止めたそうだ。それからは「日本通」のメッキがはげ、せっかくのデートが台なしになったことはいうまでもない。

送還されて帰国しても話はつきない。せっかく覚えた日本語を忘れないようにと、友人は日本語学校の門をたたいた。クラスを決める日本語でのインタビューに応じると「あなたはこの学校の生徒ではありません、先生です」といわれ、日本の最新事情や文化に詳しいことから、短期で日本を訪問する人の個人レッスンを任される。ある日、生徒が「先生、『ものさし』って何ですか？」と尋ねてきた。さて、「花をさす」とか「モノをさす」というし、何かモノをさしておく容器だろうと思ってそう答える。だが、後で辞書をひいて驚いたらしい。「生徒に正解は伝えたの？」と私が聞くと、どうせしばらくしたら忘れるだろうから、そのうち「前にもいったでしょう。『ものさし』とはルーラー（定規）のことですよ」とシラを切るのだそうだ。

あっぱれ。さすがは、危ない作業のときには日本語がわからないふりをして、日本人に交代してもらっていたという友人である。みんな健康にだけは気をつけて、それぞれの夢をかなえて帰ってもらいたいと思う。

集住地域にあるネパール雑貨店内。雑誌は貴重な情報源である